

第2回・第3回検討会の意見と対応説明資料

平成22年2月9日

中部地方整備局 木曾川下流河川事務所

木曾三川下流域自然再生計画に関する意見と対応（自然再生検討会）

・これまでの自然再生検討会における主な意見と、その意見に対する対応状況は以下のとおりです。

自然再生計画に関する主な意見（1/3）

大分類	小分類	意見 No.	検討会区分	対応の必要な意見	意見	対応	対応
第1回、第2回検討会意見と対応資料	河床変動特性の把握	1	第3回	■	・土砂を考える上では、堰等の影響に関するデータも必要ではないか。	補足資料1	・ダム堆砂量と合わせて、 経年堆砂量図を整理する 。 ・木曾川大堰、犬山頭首工（木曾川）、長良川河口堰（長良川）、岡島頭首工（揖斐川）の直上流河道横断、 縦断の経年変化で整理する 。
		2	第3回	■	・河床の縦断変化をみれば、堰等における堆積状況についても、ある程度わかる。		
	多度川と肱江川	3	第3回	-	・肱江川で大規模な掘削事業を行うようであるが、その場合、十分な配慮が必要ではないか。	-	・今後の河川整備においては、肱江川は整備計画として大規模な掘削事業が行われることから、 治水事業において環境に配慮し自然再生を検討する 。
現地調査結果	移動阻害状況調査	4	第3回	■	・移動阻害の評価において、いつの時期に、どれくらいの落差があるかの評価も必要である。	補足資料2	・樋門等における時刻水位の年変動と水深・落差を整理する。堤内地側の地形や生息する魚種等が充分把握できていないことから、 今後の検討課題とする 。
		5	第3回	■	・遡上を評価するうえでは、落差だけでなく水叩き部の水深も考慮する必要がある。	補足資料2	・魚類の体高からみた 水叩き部の必要水深について整理し 、潮位変動との関連から 年間どの程度遡上、降下が可能か整理する 。
		6	第3回	-	・樋管・樋門の先の堤内地側の環境、降雨時の状況、魚類等の生息状況等をふまえて評価する必要がある。	-	・堤内地側の環境については、地形や生息する魚種等が充分把握できていないことから、 今後の検討課題とする 。
	藻場調査	7	第3回	-	・広域的に藻の生育が確認されており、現在の環境について一定の評価ができる	-	-
		8	第3回	-	・藻は河川の透明度等の環境に鋭敏に反応するので、工事時の濁水対策を行うなど、環境面を維持することが重要である。	-	・今後の河川整備の際の対策として取り組んでいく。
	サギ類生息地調査	9	第3回	-	・千本松原にとって害があっても、サギの営巣等を増やしていてもいいのか、議論が必要である。	-	・アオサギの営巣地、集団営巣は、東海地方では非常に珍しいため、アオサギと千本松原の共存共栄を目指し、 継続監視 していく。
骨子案（環境保全方策）について	河川の現状	10	第3回	-	・ヨシ原は戦前から戦後には十分にあり、地元で刈り取って利用していたが、伊勢湾台風によってダメージを受けたようで、それ以降少なくなった。	-	-
	河川環境の課題	11	第3回	○	・木曾三川それぞれの個性、優先順位をふまえた対策が必要ではないか。	補足資料3、骨子p26,29~31 優先順位等の詳細については次回提示予定	・木曾三川それぞれの河川の特徴を踏まえた 自然保全・再生のイメージを提示する 。 ・ただし、詳細等については、 次回原案等で順次提示 していく。
		12	第3回	○	・木曾三川下流が環境面でどの程度重病なのか。現状のままではいいのか、緊急性（絶滅等の懸念）があるかを説明すべきである（たとえば、木曾川上流ではイタセンパラ）。長期的な観点からも、個体数の減少、種の絶滅の危機があるか、また、どんな外来種が増加しているか、さらに絶滅しそうな生物のために、こんな環境を保全するというストーリーを整理したほうがいい。	p15~17,25	・干潟、ヨシ原で見られなくなった種（イセウキヤガラ、ヒヌマイトンボ）から、干潟・ヨシ原再生に繋げる観点から整理する。 ・外来種については、木曾三川下流域において現状では大きな問題となっていないが、 今後継続監視 していく。
		13	第3回	○	・場と生物との関連性の説明やその仮説の検証のためには、インパクト・レスポンスの関連付けた図（フローチャート）を作成しておくことが効果的である。	p15	・河川環境の主な課題（人為的なインパクト）で、 木曾三川下流のインパクト・レスポンスを整理する 。
		14	第3回	○	・ケレップ水制によるワンド群の環境が、将来的にも維持されるのか、有機物が堆積して悪化するかどうかの評価が必要である。	p26	・ケレップ水制の一部では、過去には干潟であった箇所に植生が繁茂、樹林化の現象が見られる。 ・ケレップ水制は基本的には、 人為的に手を加えて、管理 していく。その上で将来的に維持されるかどうか、 今後、調査・検討 していく。
15	第3回	○	・長良川は河口堰の存在により、上流が淡水となって夏場は貧酸素、下流はヘドロ堆積等の問題があり、その問題点を課題として取り上げるべきではないか。河口堰やその周辺には、移入種のタイワンシジミやカワヒバリガイが多く生息していることも大きな課題である。	p15	・木曾三川下流のインパクト・レスポンスの中で 河口堰建設をインパクトとし、レスポンスで外来種を整理 。 ・平成16年度中部地方ダム等管理フォローアップ委員会定期報告書、平成19年度・20年度ダム等管理フォローアップ年次報告書によると、長良川河口堰上流の、D0その他の水質項目については一時的な悪化期間はあるが現状で大きな問題は報告されていない。また、底質については、粒度の細粒化などが生じているものの、規模の大きい出水により改善され、経年的に蓄積されていない。		

※対応の必要な意見

○・・・骨子案（詳細版）に反映する事項

■・・・第3回検討会の意見と対応で整理する事項

一・・・治水事業等の中で配慮していく事項、委員会の中で対応済みの意見や委員の感想等

木曾三川下流域自然再生計画に関する意見と対応(自然再生検討会)

自然再生計画に関する主な意見 (2/3)

大分類	小分類	意見 No.	検討会区分	対応の必要な意見	意見	対応	対応	
骨子案(環境保全方策)について	自然再生の費用対効果	16	第3回	-	・広大な河川においてはヨシ再生の効果がどこに出ているかというのを評価するのは難しく、また、別の要因で向上した環境機能を効果と見なす可能性もあって、費用対効果を出すことも難しい。	-	-	
		17	第3回	○	・費用対効果を示すことが難しいからといって事業を止めるのは望ましいことではない。この面からも、自然再生事業を進める上では理念や思いを広く伝えていくことが大切である。	p 25	・干潟、ヨシ原再生の意義、役割(効用)について整理する。	
		18	第3回	-	・自然再生にかかわるコストを、費用対効果で論じることには違和感があるので、人々が豊かになるために失った(後退させた)自然を、人が治していくコストだと考えてはどうか。	-	-	
		19	第3回	○	・効果については、妥当で明確な目標を立て、それをちゃんと達成したということの評価でも良いのではないかと。	P27, P32	・干潟、ヨシ原再生においては、 昭和30年代の水際の延長 を目標とする(ただし、現状の地形や植生を考慮して再生する水際延長を設定)。 ・また、再生箇所においては現状でよい環境の 対照区を設定し 、自然再生事業後に同程度の種数や個体数となることを目標とする。	
	干潟、ヨシ原再生の意義、役割(効用)	20	第3回	○	・自然再生で、ヨシ原・干潟を再生する意義を、何故それを実施するのか、水質、生物多様性、漁業の場等、ターゲットを絞って、一般の人にもわかりやすい説明をすべきである。	p 25	・ヨシ原、干潟再生の 意義、役割(効用) について整理する。	
		21	第3回	○	・ヨシと干潟の再生についても、長期的な視点から水質との関係を明確にすることは外せないのではないかと。	p 23	・流域の関係機関との連携や日々の管理の中で水質の改善を図り、 貧酸素水塊、赤潮・青潮の発生を抑制 していく。	
		22	第3回	-	・底生動物自身が生息場を耕して干潟を良くしていくことなどから、物理的な場を確保した時に底生動物がいるか、あるいは、来るかどうかの問題である。	-	-	
		23	第3回	-	・木曾三川下流の汽水域の中で、干潟とヨシ原をどうしていくのか検討会で議論したほうが良いのではないかと。	-	-	
		24	第3回	○	・木曾三川の現状をふまえ、長期的に見た場合の自然再生事業による効果、とくに、その程度を整理する必要がある。	p 25, 32	・ヨシ原、干潟再生の 意義、役割(効用) について整理する。 ・また、自然再生事業では流域全体としての生物の生育・生息環境の向上を主眼としており、再生実施箇所については箇所ごとの短期的なモニタリングに加え、 広域・長期の視点で自然再生事業の効果 を把握できるよう、 モニタリング方法を工夫 する。	
		25	第2回	○	干潟・ヨシ原の再生箇所のモニタリング調査を重点的に行ってほしい。	p 32	・施工箇所においては 再生箇所のモニタリングを実施 し、再生状況の評価結果から 順応的に今後の自然再生事業にフィードバック する。	
		26	第3回	○	・何を以て成功とするのかという定義が必要。例えばヨシが生えればいいのか、ヨシが持続的に更新するのを目指すのか、それによってモニタリングの中味も変わる。		・ヨシが持続的に更新し、長期的にヨシ原を形成する環境を目指している。 広域・長期の視点で自然再生事業の効果 を把握できるよう、 モニタリング方法を工夫 する。	
		27	第3回	○	・事業の意義、効果を示すためにも、評価をするうえで対照区が必要である。		・施工箇所においては、モニタリング調査において 対照区との比較を検討 していく。	
		28	第3回	○	・自然再生事業のモニタリングは、長期的にみる必要がある。施工直後は増加するが、その後減少していく可能性もあり、その場合には原因を把握する必要がある。		・モニタリングは箇所ごとの短期的なモニタリングに加え、 広域・長期の視点で自然再生事業の効果 を把握できるよう、 モニタリング方法を工夫 し、評価結果から 順応的に今後の自然再生事業にフィードバック する。	
		目標について	29	第2回	○	・季節感のある目標がよい。(モニタリングでは、特に春調査が実施されないことが多いが季節調査を実施してほしい)	p 32	・事業箇所においては指標種に注目して事業の達成度を評価するため、評価の対象となる 指標種にあわせた調査時期を設定 する。
			30	第3回	-	・目標を昭和30年代後半にしたのはなぜか。開発や治水事業等を経た今、昭和30年代後半の環境に目標を設定するのは望ましいけれども、実際には難しいのではないかと。	-	・昭和30年代後半というのは、伊勢湾台風後の災害復旧が概ね終了した時期ということで設定した。 ・なお目標のイメージは、 30年代後半の縦断的な「水際の延長」として いるが、治水、河川利用等に配慮する必要性から必ずしも目標イメージを達成できるわけではない。 ・干潟、ヨシ原の再生により、 水域から陸域までの生態的な連続性の回復 についても考慮する。次回原案においては、水際の自然再生を考慮した具体的な計画を提出予定。
			31	第3回	-	・流れ方向の連続性は、公園や広場などで絶たれているところが多いので、元への修復は困難である。そうでない所をこれ以上悪くしないようにする計画が必要である。他方流れと直角の(内地から流心に向かう)連続性が大事であることから、そのポイントとなる水際の自然再生を考慮した具体的な計画が必要である。		

※対応の必要な意見
 ○・・・骨子案(詳細版)に反映する事項
 ■・・・第3回検討会の意見と対応で整理する事項
 一・・・治水事業等の中で配慮していく事項、委員会の中で対応済みの意見や委員の感想等

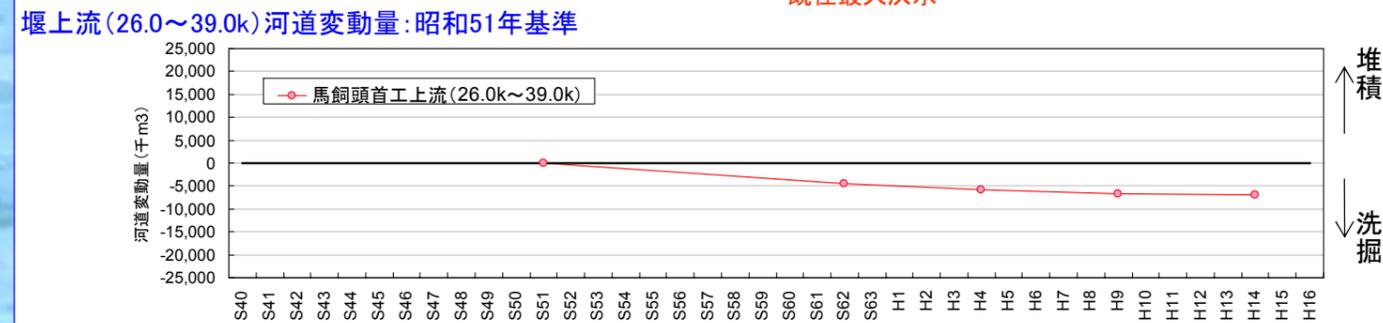
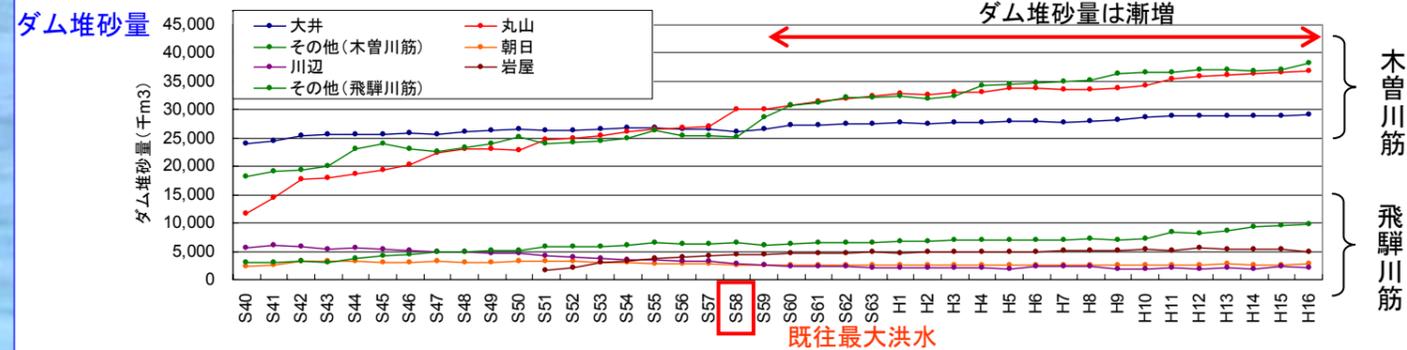
木曾三川下流域自然再生計画に関する意見と対応(自然再生検討会)

自然再生計画に関する主な意見 (3/3)

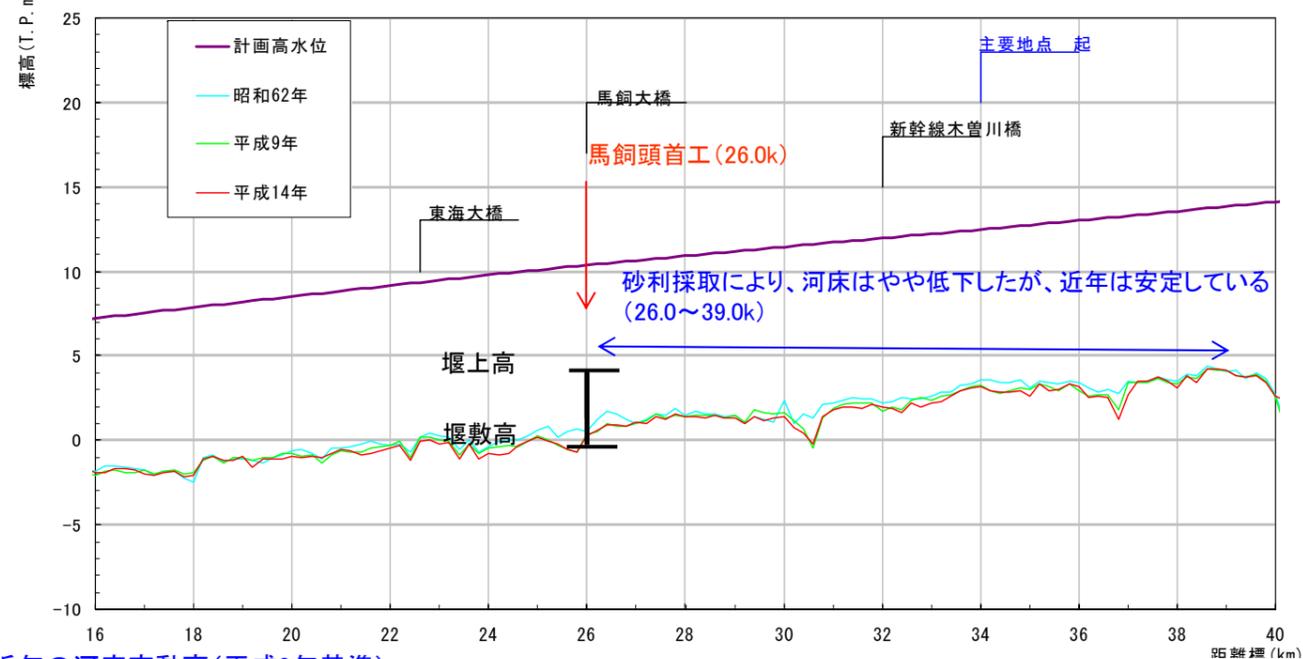
大分類	小分類	意見 No.	検討会区分	対応の必要な意見	意見	対応	対応
骨子案(環境保全方策)について	堤内地との連続性	32	第3回	-	・流域の連続性を考える場合、堤内地との水域の連続性も重要である。課題の整理で、連続性が絶たれていることについても触れるべきである。	-	・堤内地側の環境については、地形や生息する魚種等が充分把握できていないことから、 今後の検討課題 とする。
		33	第3回	○	・木曾三川下流の自然再生として次のものがあがってくると考える。 ①汽水域のヨシ・干潟 ②支川の縦断・横断の連続性(支川の連続性は、支川の堰はもちろん、汚濁物も流下してくることから必要)	-	・汽水域のヨシ・干潟の再生については 環境方策として記載 した。 ・支川や堤内地側の環境については、地形や生息する魚種等が充分把握できていないことから、 今後の検討課題 とする。
	外来種対策	34	第3回	○	・津屋川にオオフサモが繁茂しており、岐阜県が2007年から駆除している。下流に流れていく可能性があるため、揖斐川22km上流は今後注意しておく必要がある。	p 23	・津屋川のオオフサモを含む外来種については、 今後継続監視 していく。
		35	第3回	○	・自然再生計画には、外来種、貴重種について方向性は記載する必要がある。外来種は、特定外来種等だけではなく、国内移入種の問題もあることに留意する(例えば、長良川のギギ等)。気候変動に伴い亜熱帯性の種が入ってくることもある。	-	・外来種については流域全体で取り組む必要があり、 今後、継続監視 していく。 ・国内移入種については整理し、同様に 留意して監視 していく。
	水質対策	36	第3回	-	・樋管・樋門を通じて周辺から流入してくる水の水質も合わせて考える必要がある。	-	・ 今後の検討課題 とする。
		37	第3回	-	・昔は黒いシジミが多かったが、最近では黄色いシジミが多い。自然再生事業の中で、その実態を調査してもらえないか。	-	・水質とシジミの色の関係は明確ではないが、揖斐川では黄色いマシジミや外来種のタイワンシジミが確認されているため、これらの個体が混ざっている可能性がある。 ・長期的なモニタリングなどで、 可能な範囲で留意 して調査する。
		38	第3回	○	・木曾三川では、人口が増加し、土地利用が変化しているが、下水道の整備率は低い。周辺からの汚水を減らす対策の考慮が必要である。	p 23	・環境保全方策として、下水処理の高度処理化などについて 流域の市町村等との連携 を図る。
		39	第3回	○	・流入支川の水質に関し、環境基準を満足していればいいという訳ではない。		
		40	第3回	○	・畜産関係者が牛の排尿を自分の占有地に牧草の肥料として撒き、それが下流に流れ、水質を悪化させている面もある。		
	地域との連携	41	第1回	○	物理環境を自然に戻すだけでなく、外来種対策の観点も必要である。このためにも、住民との連携・協働は重要である。	p 33	・外来種対策については提示済み。 ・河川に関わる活動をしている団体などと協力し、 地域住民による簡易なモニタリング調査の実施へと協働を拡大 する。 ・地域との協働により、 流域と連携した環境保全活動を実施 する。 ・地域との協働、NPOなどの活動と共に、 地域との協働について提示 している。
		42	第2回	○	昔、河川に生えていたヨシやヤナギは地元で燃料として使われており、地域と河川とは日常的な結びつきがあった。今は、枯れたヨシやヤナギなどは放置されており、それによる火災がしやすい状況なので対策を考えてほしい。		
		43	第1回	○	自然再生事業では、行政と住民だけではなく、行政が窓口になり住民間の活動を協働するような連携・協働による取り組みが不可欠である。		
		44	第2回	○	沿川住民と川との関わりが希薄化しており、再構築が重要である。		
		45	第3回	○	・地域住民の動向(NPO等の情報等)についても資料として示してもいいのではないか。		
		46	第3回	○	・かつてのような人によるヨシの利用を含めてヨシ原の維持を考えていくべきである。		
	施工後の維持管理	47	第2回	○	本来、干潟がなかった場所に干潟を造成しても人為的に維持することが必要となる。もともと干潟のあった場所ならば、一度造成・整備すれば地盤沈下も安定しており再生する可能性が高い。	p 28, 30	・従来干潟、あるいはヨシ原が存在していた箇所を中心に施工を検討している。 ・ただし、河道掘削・河川改修等、河道内の流況などが大きく変化しているため、 現状の地形、植生等を考慮し施工箇所を検討 する。 ・できる限り人為的に維持する必要のない形状、施工方法等を検討する。
		48	第2回	○	干潟・ヨシ原の再生後、河川管理者が維持管理を行っていくのかどうかを示して欲しい。	p 29~32	・自然再生箇所については、 できる限り人為的に維持する必要のない形状、施工方法等 を検討する。 ・必要があれば地域住民等と連携し、維持管理を行なう。

※対応の必要な意見
 ○・・・骨子案(詳細版)に反映する事項
 ■・・・第3回検討会の意見と対応で整理する事項
 一・・・治水事業等の中で配慮していく事項、委員会の中で対応済みの意見や委員の感想等

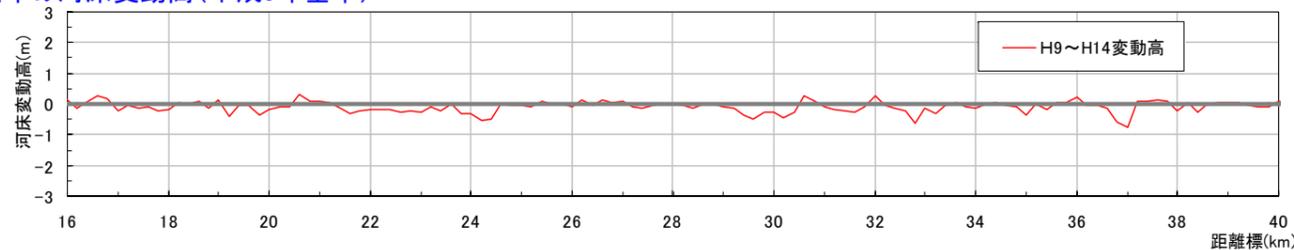
補足資料1：堰上流の堆砂量（木曾川：馬飼頭首工26.0k）



平均河床高の変化



近年の河床変動高(平成9年基準)



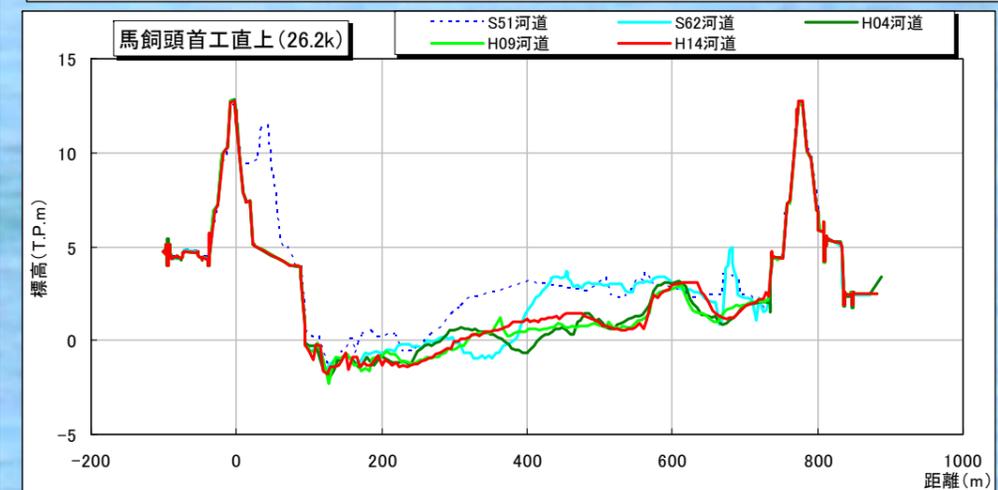
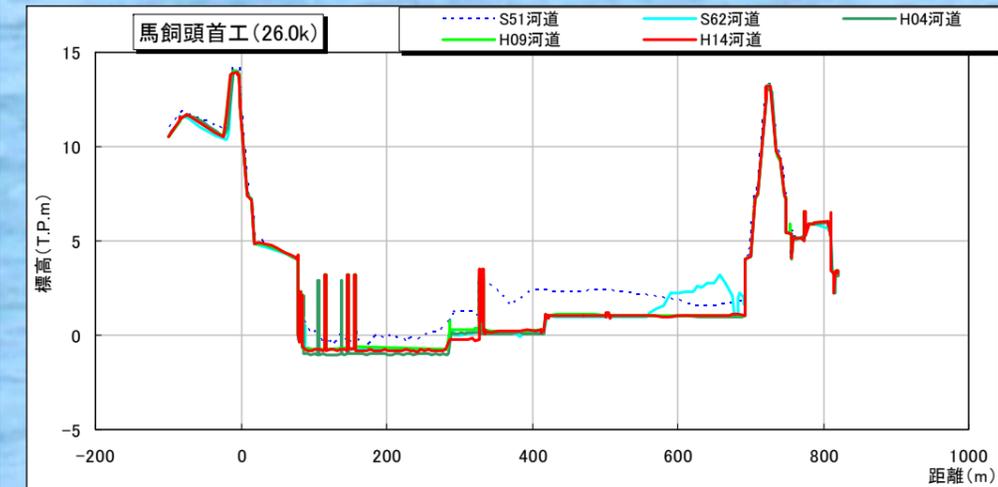
ダム堆砂量

- ・木曾川筋である丸山ダムは昭和30年、飛騨川筋の岩屋ダムは昭和51年に竣工。
- ・ダムの堆砂量は木曾川筋が大きく、昭和58年の既往最大洪水以降は漸増となり、近年のダム堆砂は少ない。

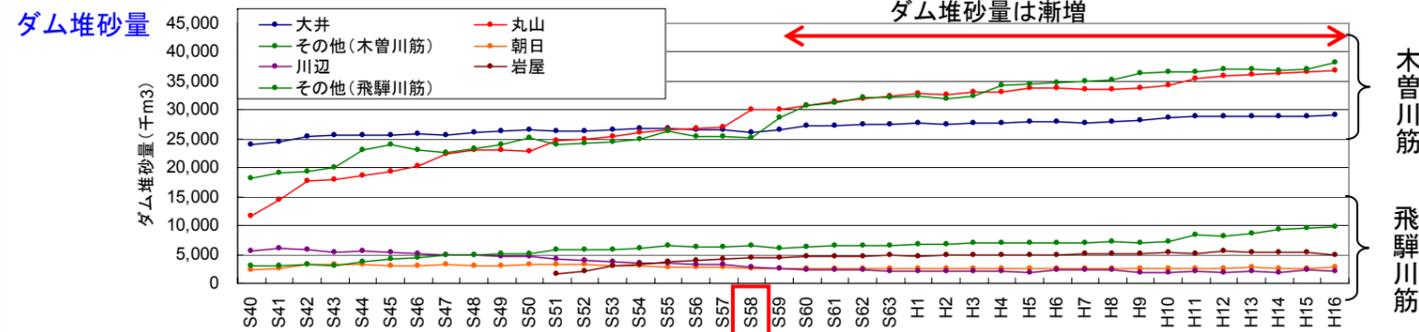
馬飼頭首工上流(26.0~39.0k)の河道変動量

- ・昭和51年に完成した、馬飼頭首工上流(26.0~39.0k)の河道変動量は、昭和51年を基準とすると、砂利採取により河床は低下したが、平成4年以降は安定している。
- ・ダム堆砂量に比べ、変動量は小さい。

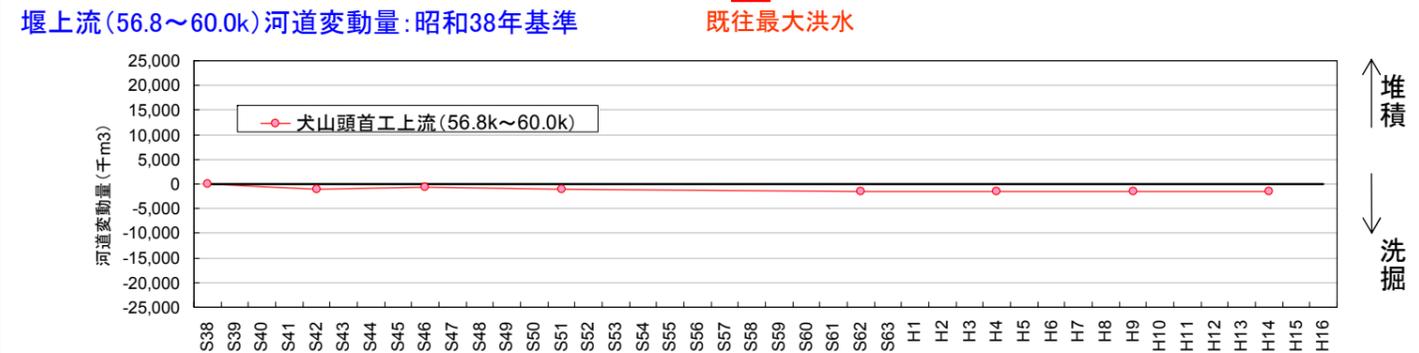
※馬飼頭首工堰上高相当の河床高までの区間の河道変動量を算出



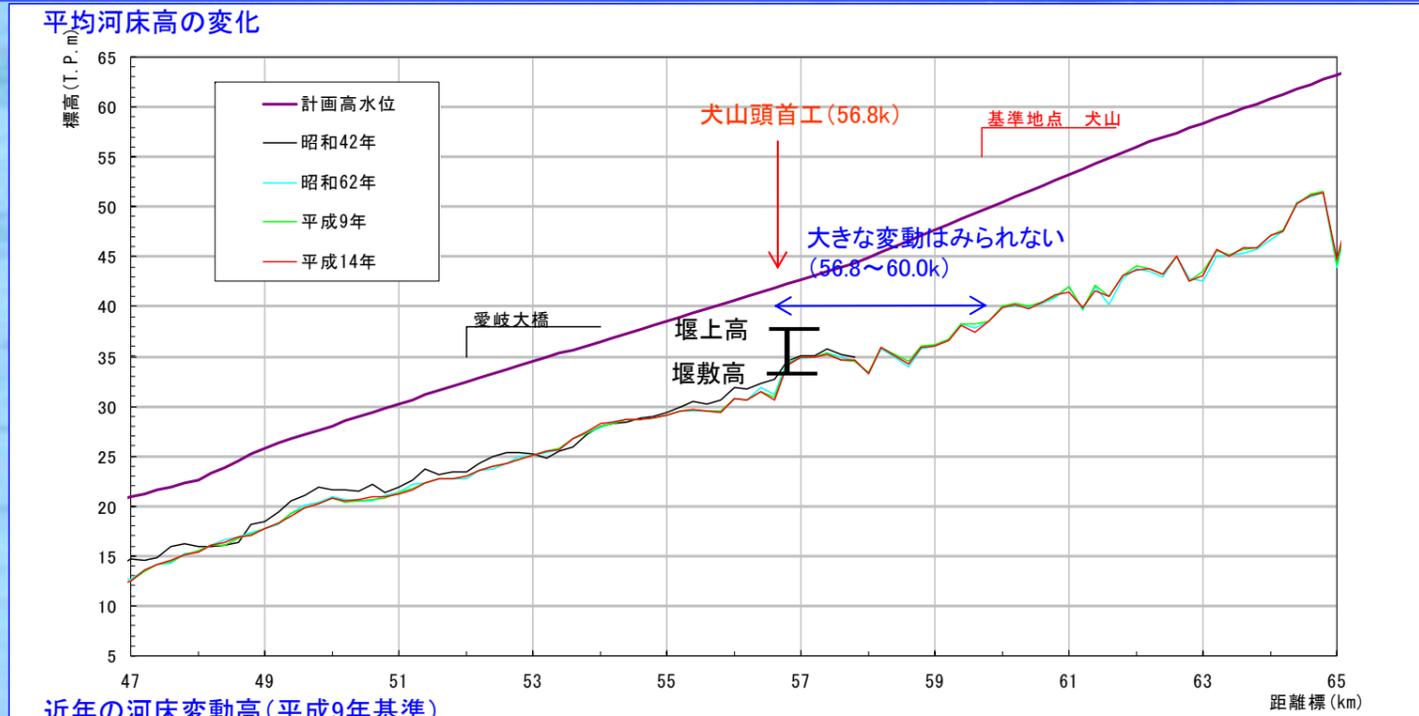
補足資料1：堰上流の堆砂量（木曾川：犬山頭首工56.8k）



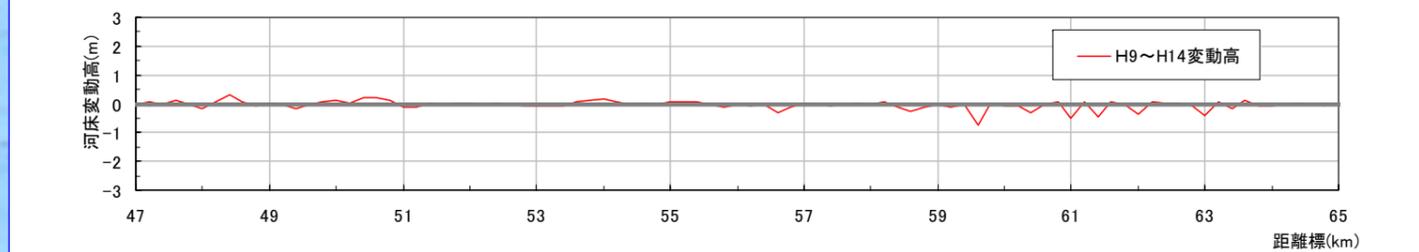
木曾川筋
飛騨川筋



堆積
洗掘



近年の河床変動高(平成9年基準)



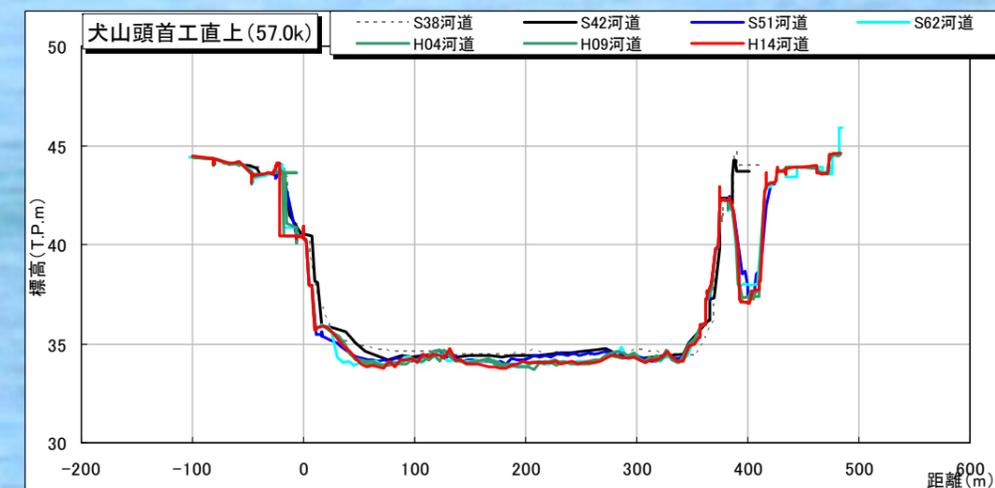
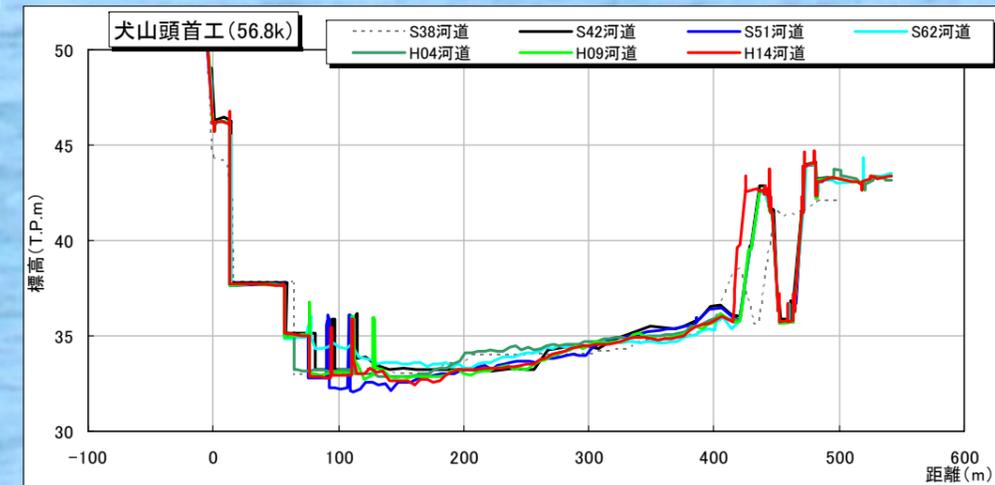
ダム堆砂量

- ・木曾川筋である丸山ダムは昭和30年、飛騨川筋の岩屋ダムは昭和51年に竣工。
- ・ダムの堆砂量は木曾川筋が大きく、昭和58年の既往最大洪水以降は漸増となり、近年のダム堆砂は少ない。

犬山頭首工上流(56.8~60.0k)の河道変動量

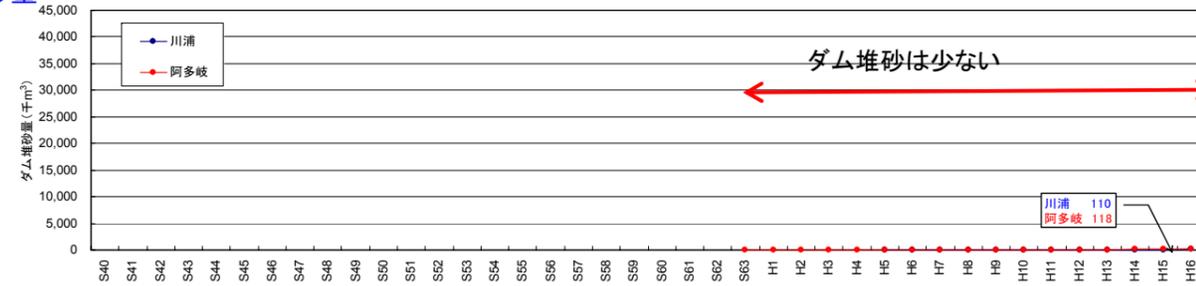
- ・昭和37年に完成した、犬山頭首工上流(56.8~60.0k)の河道変動量は、昭和38年を基準とすると、あまり変動していない。
- ・ダム堆砂量に比べ、変動量は僅かである。

※犬山頭首工堰上高相当の河床高までの区間の河道変動量を算出

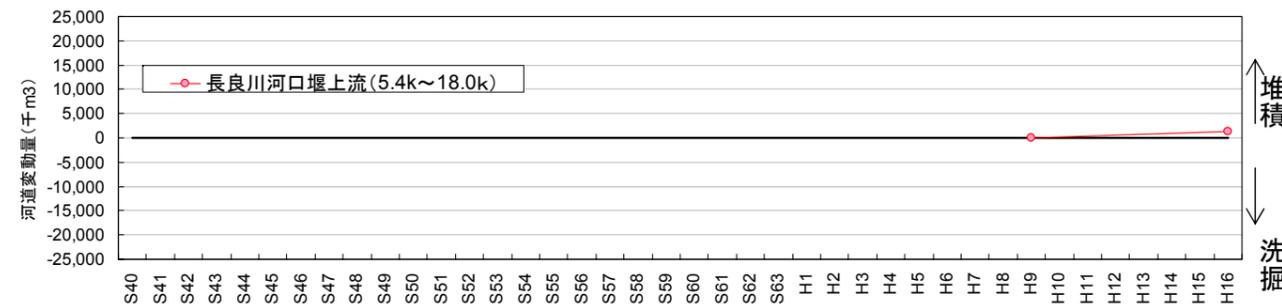


補足資料1：堰上流の堆砂量（長良川：長良川河口堰5.4k）

ダム堆砂量



堰上流(5.4~18.0k)河道変動量:平成9年基準



ダム堆砂量

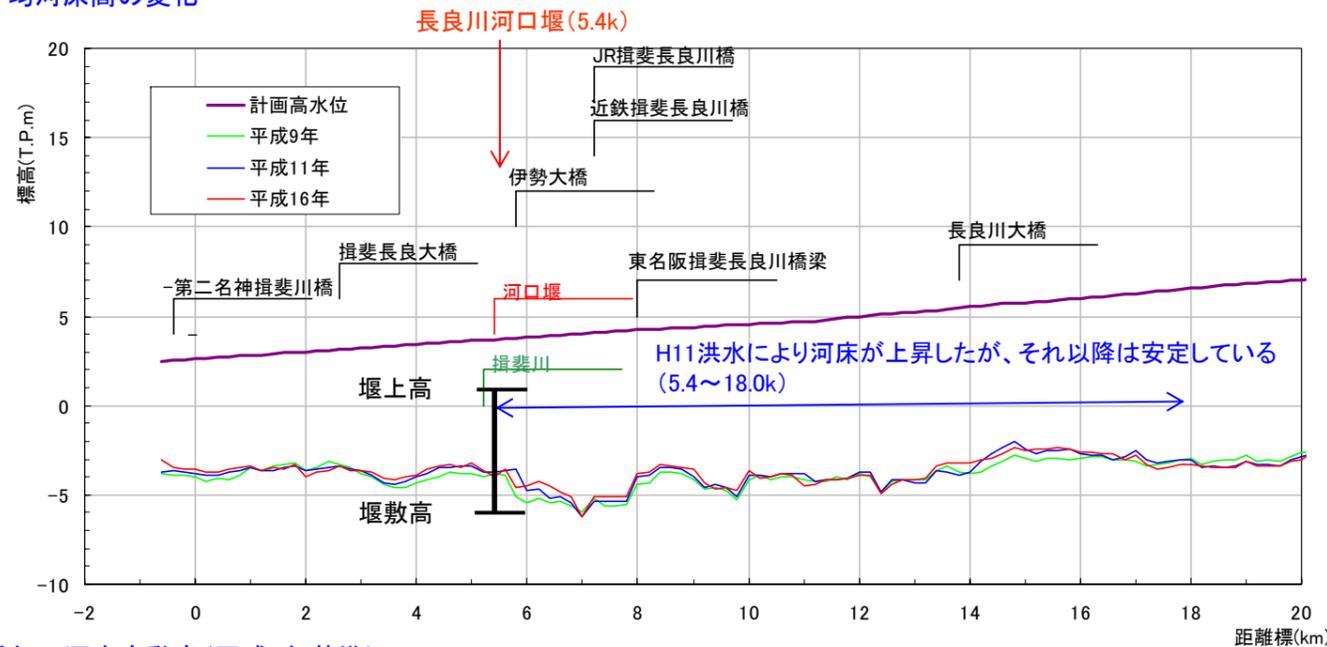
・ダム堆砂は少ない。

長良川河口堰上流(5.4~18.0k)の河道変動量

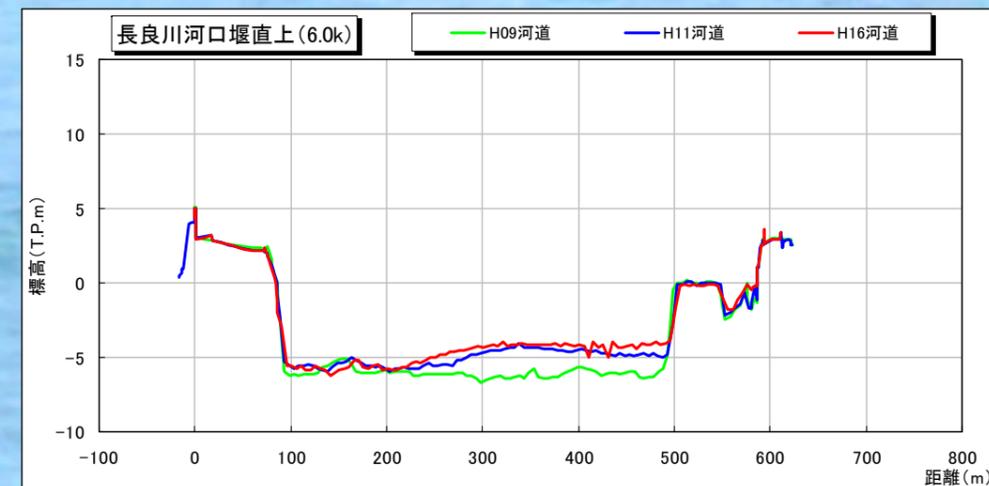
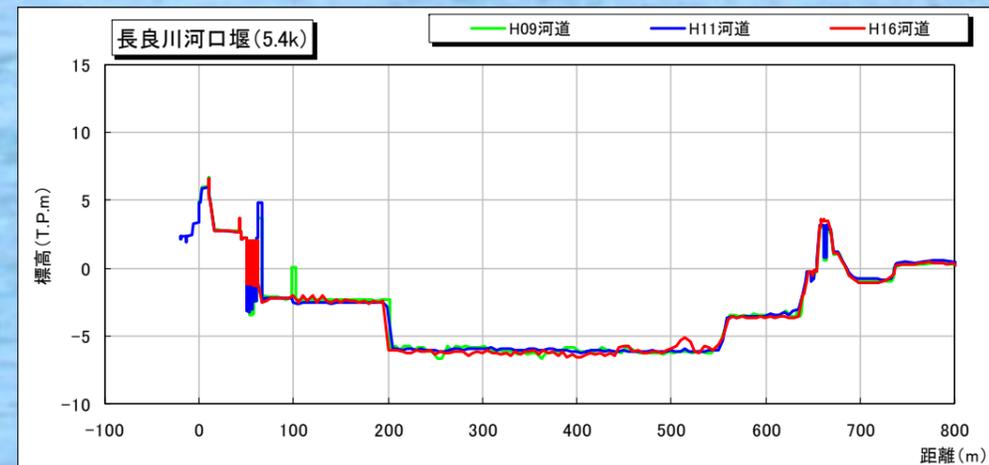
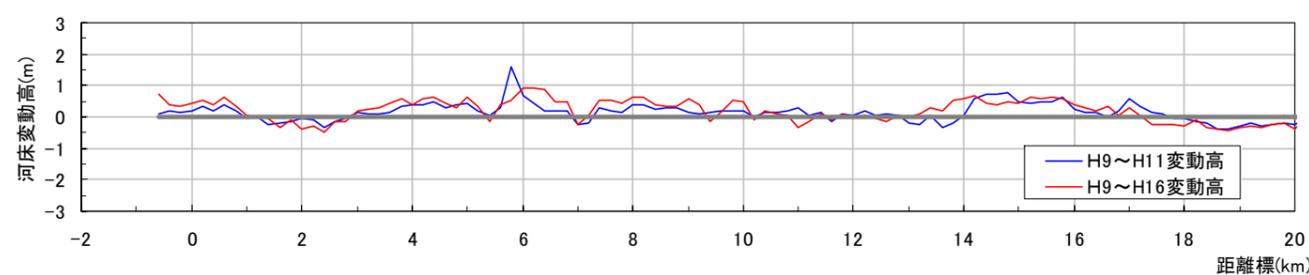
・平成7年に完成した、長良川河口堰上流から旧マウンド上流区間(5.4~18.0k)までの河道変動量は、平成9年を基準とすると、平成11年洪水による上流からの土砂供給の増加により土砂が堆積したが、それ以降は安定している。

※旧マウンド上流区間(18.0k)までの河道変動量を算出

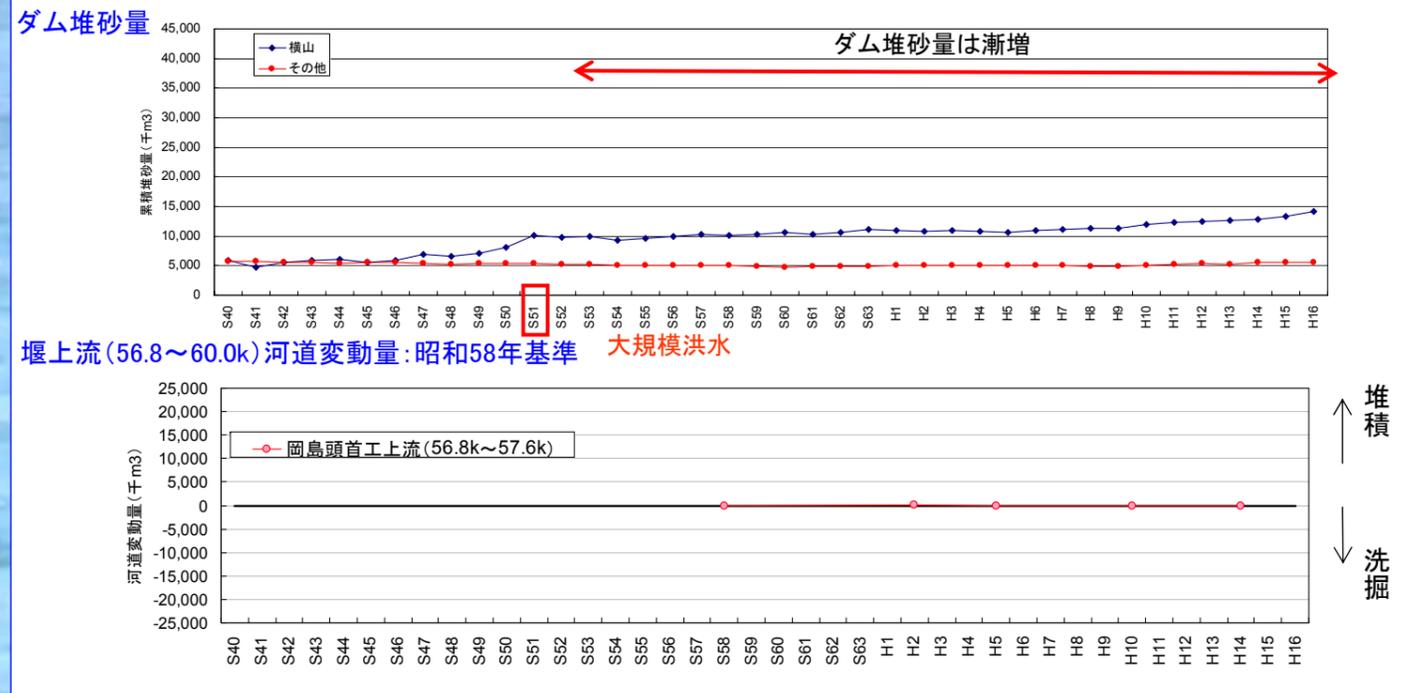
平均河床高の変化



近年の河床変動高(平成9年基準)



補足資料1：堰上流の堆砂量（揖斐川：岡島頭首工56.8k）



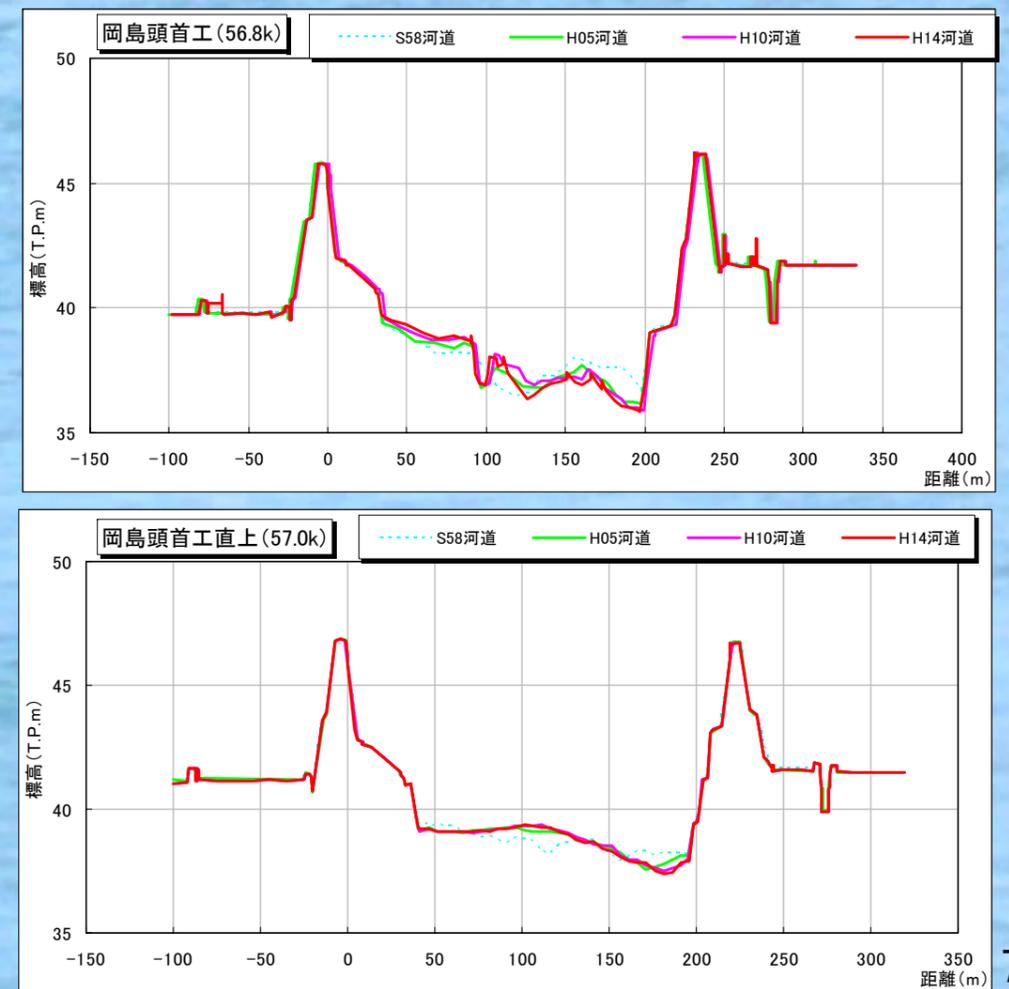
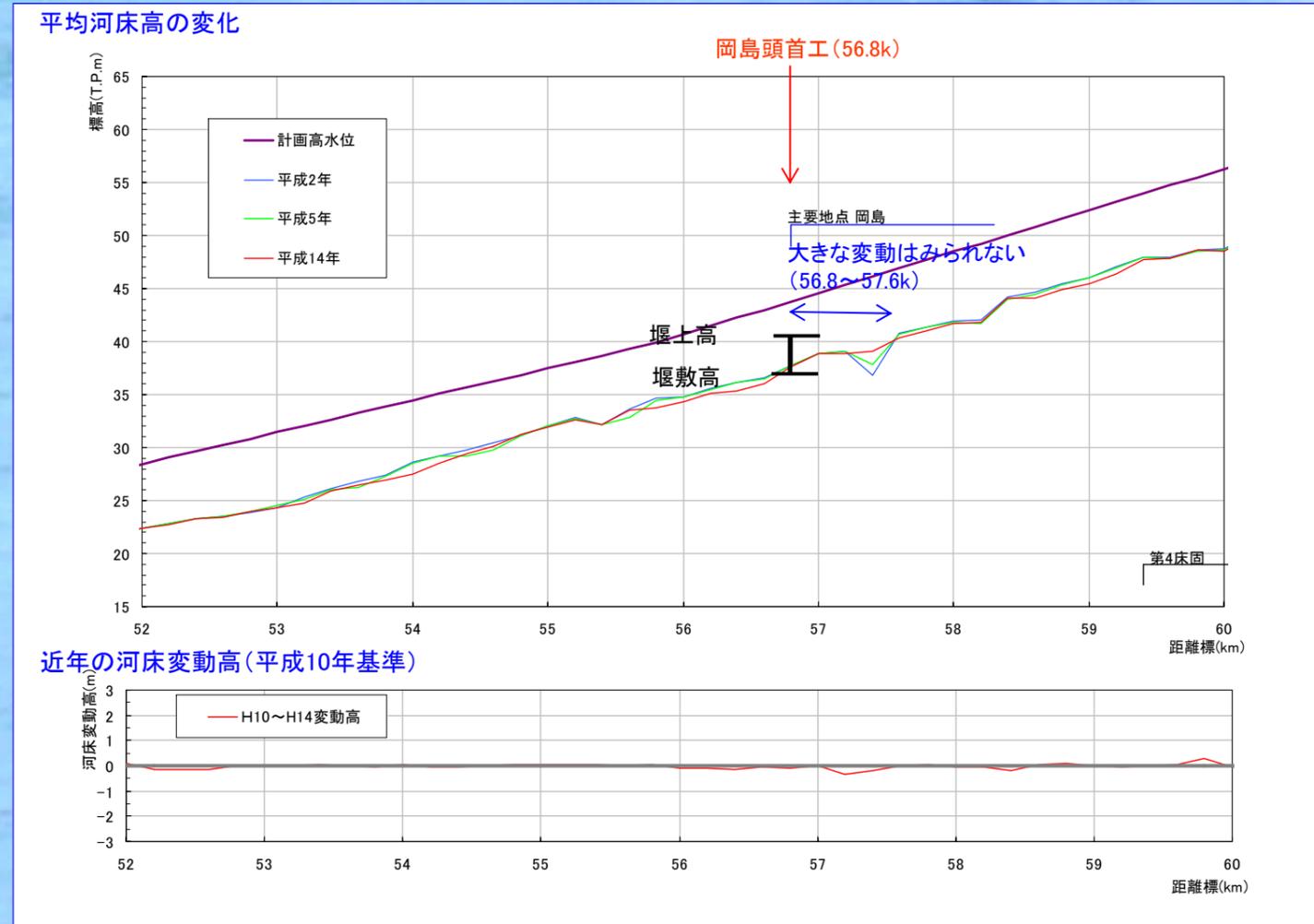
ダム堆砂量

- 横山ダムは昭和39年に竣工し、昭和51年洪水により堆砂量の増加が見られるが、これ以降は漸増となり、近年のダム堆砂は少ない。

岡島頭首工 (56.8~60.0k) の河道変動量

- 昭和57年に完成した、岡島頭首工上流(56.8~60.0k)の河道変動量は、昭和58年を基準とすると、あまり変動していない。
- ダム堆砂量に比べ、変動量は僅かである。

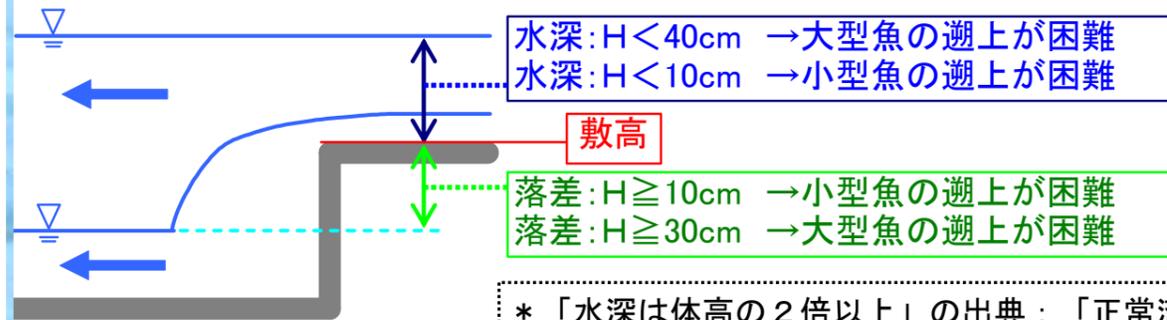
※岡島頭首工堰上高相当の河床高までの区間の河道変動量を算出



補足資料2：樋門・樋管等における移動阻害状況

- ①水深からの遡上問題箇所→大型魚の場合13箇所、内10箇所は小型魚も遡上困難。
- ②落差からの遡上問題箇所→小型魚の場合9箇所、内8箇所は大型魚も遡上困難（②は全て①に含まれる）。
- ③ただし、実際に生息する魚種や堤内地側の環境等が不明であることなどから、今後、詳細調査を実施し、対応について検討する。

水深と落差の考え方



* 大型魚：コイ
 小型魚：メダカ、タモロコ等

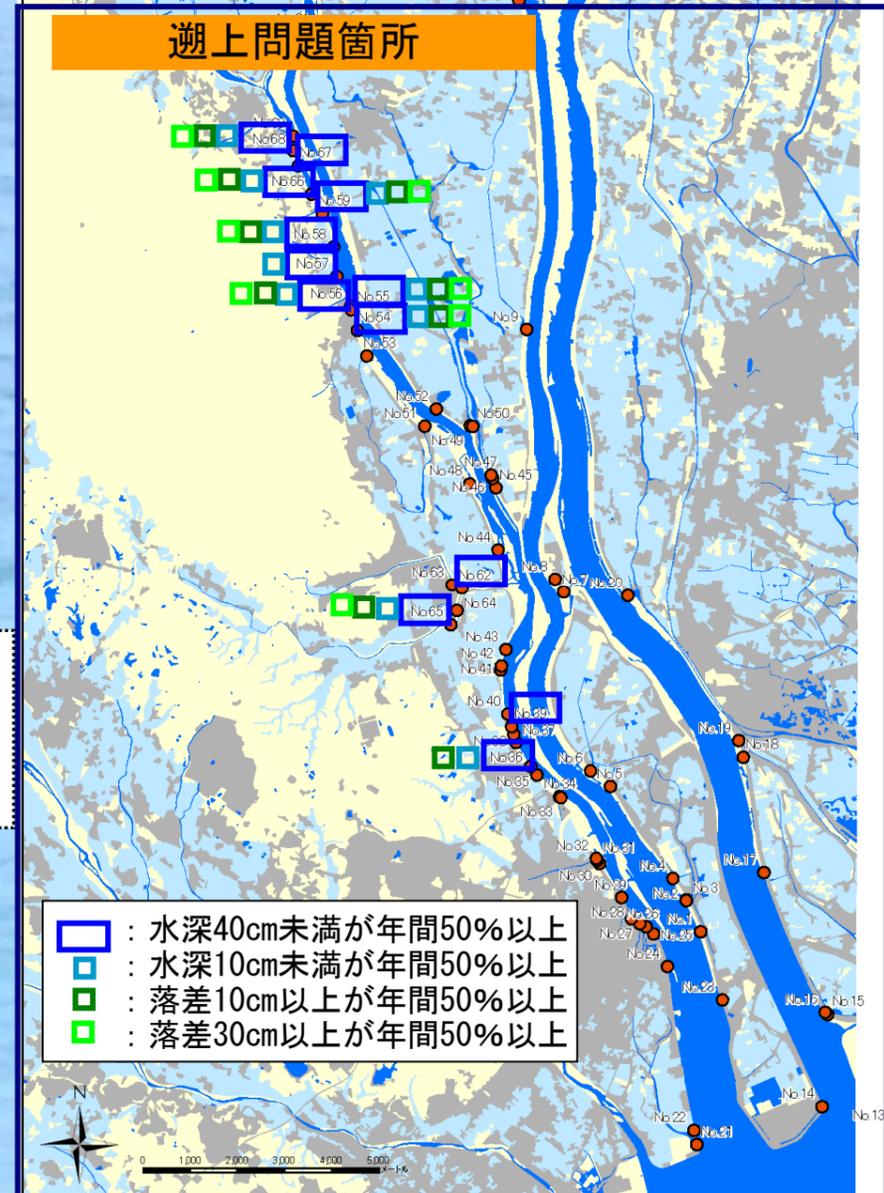
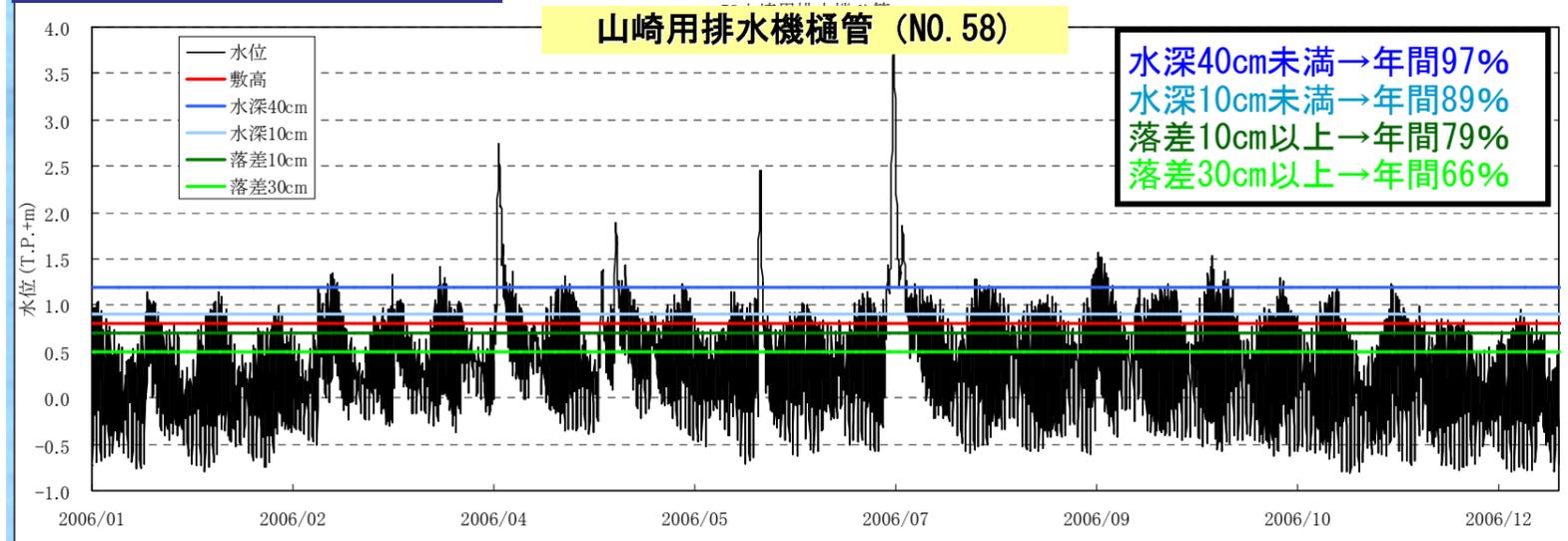
* 水深は体高の2倍以上必要と想定

* 水位は樋門の位置する本川の水位（潮位）で評価。支川等の自流の水深は考慮していない。

* 「水深は体高の2倍以上」の出典：「正常流量の手引き(案)」(2007 国土交通省河川局河川環境課)

* 落差10cm、30cmの参考文献：「田圃につける小さな魚道」(応用生態工学 3、端 憲二 2000 農林水産省農業工学研究所)、「十勝川千代田分流堰魚道に関する報告書 資料編」(2002 北海道開発局帯広開発建設部)

樋門等における時刻水位の年変動と水深・落差



No.	樋門樋管名	河川	水深		落差	
			40cm未満	10cm未満	10cm以上	30cm以上
36	深谷水門	揖斐川	×	×	×	
39	御砂ひ管	揖斐川	×			
54	小屋川ひ管	揖斐川	×	×	×	×
55	安江ひ管	揖斐川	×	×	×	×
56	石津排水ひ管	揖斐川	×	×	×	×
57	山崎南谷ひ管	揖斐川	×	×		
58	山崎用排水機ひ管	揖斐川	×	×	×	×
59	河原崎排水ひ管	揖斐川	×	×	×	×
62	赤沢ひ管	揖斐川	×			
65	北田用水ひ管	揖斐川	×	×	×	×
66	上野河戸排水ひ管	揖斐川	×	×	×	×
67	岡谷第二排水ひ管	揖斐川	×			
68	岡谷第一排水ひ管	揖斐川	×	×	×	×
			13	10	9	8

遡上問題箇所の例



岡谷第一排水樋管 (No.68)



山崎用排水機樋管 (No.58)



深谷水門 (No.36)



鍋田上水門／樋門 (No.19)

遡上可能箇所の例

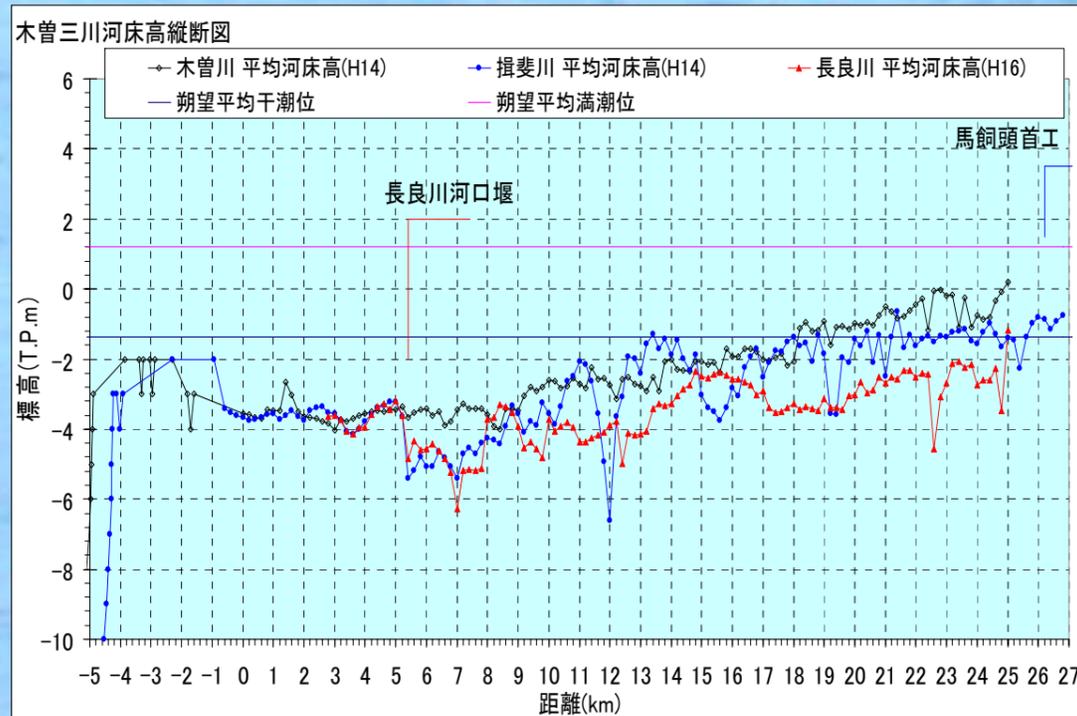
補足資料3：木曾三川の共通点、相違点

木曾三川の環境の概要

- ・木曾三川河口付近は海域の影響を強く受け、河口堰上流以外は、感潮・汽水域が形成されているという共通点があり、潮位変動は約2.6m
- ・その他、三川の物理環境・自然環境は下表のとおり

	流域諸元			物理環境				生物環境
	地点名	流域面積 (km ²)	流量(平水) (m ³ /s)	河床勾配	河床高	川幅	河床材料	生物環境
木曾川	今渡	4,632	189.96	・河口～8kmは、河床勾配がほぼ水平 ・8km～24kmは河床勾配が1/4,400～1/5,400	・河口～5km付近は三川同程度 ・5kmから上流は三川で最も高い	・河口付近で約1,000m程度であるが、24.0km付近では約600m	・河口～8.5kmはシルト、砂主体 ・8.5km上流は砂主体	・河口は、ヨシ原や干潟が一部形成し、様々な生物が生息・生育 ・感潮・汽水域である木曾川下流には、明治の三川分流工事で設置された 背割堤 や ケレップ水制 による ワンド群 等の 水際湿地 が点在し、湿地から樹林にいたる多様で豊かな自然環境が形成 ・ ワンド群には、かつて貴重種であるイタセンパラが生息していたが、近年未確認
揖斐川	万石	1,196	50.29	・河口～5kmは、河床勾配がほぼ水平 ・7km～30kmは河床勾配が1/2,000～1/7,500	・河口～5km付近は三川同程度 ・5kmから上流は木曾川について高いが、12km付近は局部的に深い	・河口付近で約1,300m程度であるが、27.0km付近では約350m	・河口～7.2kmはシルト、砂主体 ・7.2km上流は砂、砂利主体	・三川の中で自然環境が最も多く残存し、干潟や広大なヨシ原には、様々な生物が生息・生育 ・明治の改修時に設置された水制と旧堤防跡に、干潟、ヨシ原、ワンド等の湿地環境が形成 ・西側に養老山脈がそびえ、 多くの支川が流入 。多度川、肱江川の下流部には、ヨシ原等の良好な湿地環境が形成
長良川	忠節	1,607	66.26	・河口～7kmは、河床勾配がほぼ水平 ・7km～30kmは河床勾配が1/6,400～1/28,000	・河口～5km付近は三川同程度 ・5kmから上流は三川最も低い	・揖斐川合流点付近で約650m程度であるが、30.0km付近では、約600m	・河口～5.4kmはシルト、砂主体 ・5.4km上流は砂主体	・長良川河口堰上流には、 広大な湛水域 が25km付近まで広がり、カモ類などの水鳥が多く生息するほか、ササバモやセキショウモ等で構成される 藻場が帯状に分布 ・河口堰上流は、高水敷が整備された区間が連続。

流量は、木曾川がS51～H16の27ヶ年、揖斐川がS36～H16の41ヶ年、長良川がS29～H16の46ヶ年の平均



木曾三川河床高縦断面図



木曾三川の流況

河川名	地点名	流域面積 (km ²)	統計期間		統計期間での平均流況 (m ³ /s)				
					豊水	平水	低水	渇水	平均
木曾川	今渡	4,632	S51～H16	27年	308.39	189.96	127.16	86.36	284.1
揖斐川	万石	1,196	S36～H16	41年	94.67	50.29	28.63	11.56	84.28
長良川	忠節	1,607	S29～H16	46年	121.64	66.26	41.48	23.56	115.4